

上武大学とラガーディアコミュニティカレッジ ワークショップ 開催、絵手紙で交流



上武大学とラガーディアコミュニティカレッジ



ワークショップ開催、絵手紙で交流

ニューヨークを訪問中の上武大学（澁谷朋子理事長、澁谷正史学長）の教職員、学生らは3月22日(火)に、ニューヨーク市立大学ラガーディアコミュニティカレッジ（以下：LGCC）において、同校学生26名らと共に、絵手紙に関するワークショップを開催。国際交流が行われた。

ワークショップでは、日本のNHKの番組などを通じて絵手紙についての広報などを行っている澁谷朋子理事長が講師を務め、絵手紙の作り方や作成方法について解説。両校の学生らは、墨の擦り方、筆の使い方、日本画用の顔彩と呼ばれる絵具の使い方などについて共に学んだ。最後は、実際に絵手紙を3枚ずつ作成

し、日本の上武大学や、友人などに絵手紙を送付した。

当日、ワークショップに参加した学生のレイチェル・モナクさんは、「今、(日本語を話す親を持つ日本語継承語話者と呼ばれるアメリカ人学生を対象とした)日本語のクラスを取っているが、そこで学んでいる日本語や日本文化などを、絵手紙の作成、日本人学生との交流を通じて実感できてとてもよい体験だった。」と話す。

ラガーディアコミュニティカレッジで日本語と言語学を教えている永野友雅教授は、「絵手紙は、日本の書道の筆を使用して、水彩画や水墨画的な技術を使って葉書を作成するので、日本語を学習している学生にはとても興味深いようだ」と教授。続けて「短いメッセージを書くのは、俳句などにも現れる日本語のあえて言葉として表現せずに相手に伝えるコミュニケーション方法が現れていてとても面白いと感じる。今後は、絵手紙を日本語の授業や日本文化の授業などに取り入れていきたい。」と語った。

また、同校で日本語を教えている石橋理恵子講師は、「筆をあえてゆっくりと使い、描く線に人の気持ちが反映される、という発想が禅の黙想にも似て面白いですね。学生たちも日本画風の絵、勢いを大事にする書道とは逆の筆の使い方などが新鮮で、非常に集中して作成していたのが印象的でした。」と語っている。上武大学では、絵手紙の創始者である小池邦夫氏を所長とする「手がき文化研究所」を設立し、絵手紙などを通じて手がき文化の広報に努めている。同研究所では、これまで数回にわたる小池邦夫氏による絵手紙公開講座や、フランス・パリでの日本語受講者を対象とした絵手紙ワークショップなどを行っている。なお、上武大学一行は、このワークショップを海外研修の一環として位置付けており、その後、国連日本政府代表部や日本貿易振興機構(JETRO)事務所への表敬訪問、ラガーディアコミュニティカレッジ学生との市内観光などを通じて国際交流を行った

[HOME](#)

